

ゼミ生とともに

日隈ふみ子

藍野学院短期大学看護学科教員

大谷先生、ご紹介ありがとうございます。日本の開業助産婦さんの活躍ぶりを何とかまとめたいと思い調査しはじめたのが、先生とお知りあいになるきっかけだったように思います。それ以来、毎年学生が両親学級への参加や分娩見学にお邪魔して、お世話になっております。

今日は、看護学生の助産院見学とその後についてお話しさせていただきます。

助産院見学への取り組み

藍野学院短期大学では、専任教員全員が、2年生、3年生混合の学生6～10人ほどを担当し、各教員の指定テーマに沿ってゼミナールを開いています(通年開講)。ここ数年の私のゼミのテーマは「自然分娩の探究」です。人数は多くないのですが、自然分娩に興味を示す学生、助産婦学校進学希望の学生が集まって、毎年活発な意見交換をしています。しかし、このゼミで学生が最も期待しているのが、古木助産院訪問や夏休み期間中に行なっている大谷助産院での分娩見学です。

住宅街の一角に、普通の家と何ら変わらない佇まいを呈している助産院。そこで、「私は普通のおばさんに徹して、娘が里帰りしてきたような感じで妊産婦さんに関わるのよ」と学生に話して下さる古木先生。「妊産婦さんとの信頼関係を大切に、自然の経過に任せるのが一番」と、いつも温厚な表情の大谷先生。学生は、お産が特別なことではなく、生活の延長線上で営まれているということを、頭ではなく、身体で感じ取ってくるようです。そして、いよいよ夏休みの分娩時立ち会い。

学生は緊張して臨んでいるようですが、家庭的な雰囲気中で、また家族に囲まれた中での新しい生命の誕生に、学生たちは大きな感動を受けて帰ってきます。そして、この感動を多くの人に知らせたいと、10月下旬の学院祭では展示コーナーを設け、その時の学びをまとめて発表しています。

学院祭にむけて

毎年、ゼミ生が展示コーナーのテーマを考えますが、今年はそのものズバリの『生のお産』。ちょっとストレートすぎる表現のようでもあります。すべて学生の自主性に任せると言った手前、口出しは禁物。学生たちは、女子学生だけでなく男子学生も、生命の誕生、出産のこと、親になるということなどを考えるきっかけになればよいな、できたら外部の人たちにも見ていただきたいなど、ポスター作りにも精を出しました。

今年の展示内容は、1926(昭和元)年以降の婚姻率・人工妊娠中絶率・出産率・分娩場所の推移などの統計結果を折線グラフにした一覧表、写真を使つての助産院の紹介、自分たちが見学した分娩経過の紹介、助産院で出産した人の感想文の紹介、自然分娩に関する本の紹介および展示、骨盤模型を用いた児頭回旋のデモンストレーション(これは3年生が大奮闘)、沐浴ベビーを使っただっこの練習、そして反対側のコーナーでは、助産院における自然分娩のビデオを常時上映するというものでした。

さて、当日、どれだけの人が足を運んでくれるかと内心心配しながらの開幕。



そして、当日

● 反応は上々。時間的余裕のない中、一生懸命まとめたグラフや分娩の経過表に、女性も男性も足を運んでくれ、掲示物の前であれこれと話し合っています。

私が顔を出した時は、ちょうど出産のVTRに10人くらいの人たちが見入っているところでした。学生だけでなく外部の人らしい方々の顔ぶれもあります。いちばん後ろのドア近くで見ていた男子学生2人。VTRが終わってもすぐ立とうとせずにいましたのでリハビリテーション学科の学生だと思い、「どこかわかりにくいところはなかったかしら」と話しかけてみました。少し躊躇した様子でしたが、「勉強になりました。女の人って凄いですね」と殊勝な顔つきで応えてくれます。しばらくするといろんな質問が出てきたので、少し医学用語を交えながら説明していると、わかったようなわからないような顔つきなのです。「ところでどちらから来てくれたのかしら」と尋ねると、なんと社会学部と経済学部の一般学生でした。彼らはミニコミ紙で今回の学院祭のことを知り、どんなことをしているのかと思って来た、出産のことなんて何にも知らなかったが、男性としてもお産のVTRを見れたことは良かったとのこと。

● こんな一般男子学生の反応にこちらも嬉しくなり、大サービス。女性の身体や男性自身の身体について、性に対する女性の気持ちのこと、赤ちゃんがどうやって生まれてくるのかなど、質問も受けながら説明しました。ゼミ生とも互いの学生生

活やバイトの話に花が咲き、「これからジェンダーの科目をとる予定になっているのでよかった」(社会学部の学生)、「2年生までは大講義室で教員との触れあいも少なく一方的な講義で面白くなかったが、今日のような体験は新鮮でためになった」(経済学部の学生)と、それぞれ感想を述べて帰ってゆきました。

助産院で見学したことや学んだことをまとめ、学院祭に取り組んだことは、外部の人の反応も得られ、他大学生との交流の場ともなり、ゼミ生にとって大きな満足をもたらしたようです。

これから親となるかもしれない男性や女性にとって、自分や異性の身体や性に対する反応の違いなどを知ることは非常に大切であるにもかかわらず、その機会は非常に乏しい現状であることを再認識させられた思いでした。また、若者が生と性についての正確な知識を知りたがっているということもわかりました。今年度のゼミはまだ続いておりませんが、自然分娩についての学びをさらに深め、今回の体験をもとに他の学部友人や知人に対して生と性についての情報提供者になってくれることを期待しています。

* * *

さて次は、北里大学病院時代以来のおつき合いをさせていただいている森みね子さんです。彼女は、長期にわたってインドネシアで助産婦としてご活躍されたという体験の持ち主です。現在は、町民からの「自然分娩ができる施設を残して欲しい」という強い要望のもとで存続することになった町立の病院に勤務されています。森さん、よろしく！